OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語の挨拶表現と助詞ヲ ： 書き言葉コーパスから収集した用例を基に
Author(s)	藤平, 愛美
Citation	日本語・日本文化. 2018, 45, p. 45-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68128
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

日本語の挨拶表現と助詞ヲ
―書き言葉コーパスから収集した用例を基に―

藤平　愛美

1. はじめに

「おはよう」「こんにちは」「ありがとう」のように挨拶として使用される定型表現は、文法上どのようなものだと解釈されるべきだろうか。『新明解国語辞典』をはじめとする多くの辞書において、これらの言葉は感動詞として分類されている。石川(2016）によると、「国語教育において感動詞は『感動、応答、呼びかけ、あいさつ』などを表すものと説明されることが多い（p.131)」とされている。しかし、「ありがとう」を感動詞として考えるのには、定義上の問題が生じる。国語学・日本語学において品詞分類が論じられるとき、感動詞は「自立語で、活用がなく、独立語になるもの」と定義されている。確かに「ありがとう」のような言葉は（1a）のように独立して単独で使用される場合もあるが、（1b）のように名詞句を伴ったり、（1c）のように従属節を伴ったりして、文の述語として機能する場合もある。また、（1d）の「ありがとうございました」のように過去形に活用して使用される場合もある。

（1）（誕生日プレゼントを受け取って）
a. ありがとう。
b. 誕生日プレゼント、ありがとう。
c. 誕生日プレゼントをくれて、ありがとう。
d. 誕生日プレゼントをくれて、ありがとうございました。

このように、「ありがとう」は感動詞の文法上の定義にあてはまらないのである。

その一方で、感動詞は本来活用しないものであるという定義を根拠に、（1d）のような「ありがとうございました」は挨拶語（もしくは挨拶言葉）として使用されているのではなく、一般的な形容詞の叙述用法であると考える立場もある。文化庁（編）（1995）は、「あいさつ語というのは感動詞のようなものであって、それ全体で独立して用いられ、それだけでまとまっている。したがって、その一部が、文法上の時の変化を持つことは本来はあり得ないのである（p.615）」とし、さらに「『ありがとうございました』もあいさつ語ではない。それは、『楽しゅうございました』と同じような叙述であると考えるべきである（p.616）」としている。その立場では（1d）のような「ありがとうございました」という文を（2）と同類のものと見なしていることになる。

（2）本日の会合は非常に有意義で楽しゅうございました。

しかし、本稿では「ありがとう」をはじめとする挨拶表現が「NP ヲ」という形でその対象を表し、その文の中で述語として機能していることを書き言葉コーパスで収集した用例から提示する。これにより、ヲ格名詞句を対象として取るという点において通常の形容詞の叙述とは異なるものであり、さらに挨拶表現が活用のない独立語としてではなく、文の中で述語として機能するものだと考える。そこで、本稿では、「ありがとう」などの感謝・謝罪・祝福の気持ちを伝える定型表現を「挨拶表現」と呼び、挨拶表現を述語として他の語と結びつき文となったものを「挨拶表現文」と呼ぶ。このように挨拶表現が従属節を持つ「文」として成り立つことは決して目新しいことでもないが、挨拶表現がどのようにして述語として機能しているのかを論じた先行研究はほとんど見られない。

本稿では、挨拶表現の中から「ありがとう」「すみません」「ごちそうさま」「おめでとう」を取り上げ、これらの挨拶表現が対象名詞句を表す場合の助詞の使用状況について『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、「BCCWJ」と呼ぶ）を調査する。その結果、挨拶表現が助詞ヲを伴う名詞句と共起することを指摘する。

次に、挨拶表現の対象を表すと考えられるヲ句[1)]（以下、「挨拶表現の対象の

ヲ句」と呼ぶ）が文の中でどのような機能を果たしているのかを論じる。その中で、ヲ句が従属節内に位置しており、従属節の述語が省略されているのではないかという説を否定する。それに加えて、対象を表すヲ句が挨拶表現と直接関わるものだとした上で、挨拶表現の対象のヲ句と「状況のヲ」句が共起できること、さらに挨拶表現の対象のヲ句と「状況のヲ」句との間に語順の制限があることを示す。これらのことより、挨拶表現文に現れるヲ句は、挨拶表現と直接結びつく要素であり、挨拶表現の対象を表すものであること、さらには句構造の中でも比較的低い位置に生起することを提案する。

2. 先行研究

ここでは、挨拶表現と助詞ヲの共起に関する先行研究と、さらに助詞ヲの機能に関する先行研究を概観する。前者は第 3 節で見るコーパス調査の前段階として位置づけられるものである。また、助詞ヲがこれまでどのように分類され、分析されてきたかを見ることは、第 4 節で論じる挨拶表現文に現れる助詞ヲの機能への議論につながると考える。

2.1.「ありがとう」と助詞ヲの共起

挨拶表現を文法の面から分析した研究はほとんどないが、ここでは藤平（2017）を概説する。藤平（2017）は「NP ヲありがとう」という構文の存在を指摘し、BCCWJ を使って、その対象名詞句の助詞について分析した。（3）に藤平（2017）が調査対象とした例文を挙げる。

（3）a. 早速の返信をありがとうございます。[2)]
　　b. 早速の返信 Ø ありがとうございます。（藤平 2017: 53）

BCCWJ において「ありがとう」文に現れる「助詞ヲ附加形式」（＝（3a））と「無助詞形式」（＝（3b））の使用状況を比較した結果、感謝対象を表す名詞句は無助詞形式を取るのが無標であることが示された。その一方で、助詞ヲ附加形式は 2000 年代から増加してきた比較的新しい構文ではあるものの、名詞句を伴う

「ありがとう」文のうちの約 2 割を占めているという事実を指摘した。また、無助詞形式と助詞ヲ附加形式が同一の意味を表していないこと、つまり無助詞形式から助詞ヲ附加形式に適切な復元ができないことから、無助詞形式と助詞ヲ附加形式は異質なものであり、無助詞形式が助詞ヲ附加形式から助詞ヲを省略したものではないと結論づけた。さらに、無助詞形式は「主題（topic）」を表すゼロ助詞であり、助詞ヲ附加形式はゼロ助詞を格関係へと再解釈した際に現れたものだと主張した。

本稿では、このような助詞ヲを伴う名詞句が現れるのは「ありがとう」文のみでなく、そのほかの定型挨拶表現を用いた文でも見られることを示す。さらに、助詞ヲの機能に関する先行研究を概観し、挨拶表現の対象を表す助詞ヲは「状況のヲ」や「移動のヲ」と連続性を持ちつつも、異なるものであることをヲ句の共起と語順制約という観点から示す。

2.2. 助詞ヲに関する先行研究

次に、助詞ヲに関する先行研究を概観する。助詞ヲは対象を示す格助詞だけでなく、「状況のヲ」、「移動のヲ」、「接続助詞的なヲ」などに分類されて分析されてきた。杉本（1986，1993）や加藤（2006）、天野（2008a，2008b，2010）などの先行研究では、それぞれのヲは連続性があるとされているが、どのヲまでを格助詞として捉えるのかについては、各研究によって異なる。

最も典型的な助詞ヲは、目的語をマークする格助詞としてのヲである。その機能は、動作や感情のおよぶ対象を表すことである。文献によっては、「対象のヲ」「対格のヲ」とも呼ばれている。例えば、（4）のように対象（＝「次郎」）に影響を及ぼす他動詞（＝「ける」）とともに使用される。

（4）太郎は次郎をけった。

次に、「移動のヲ」の例を（5）に、「状況のヲ」の例を（6）に掲載する。

（5）太郎は遊歩道を歩いた。（杉本 1986: 281）

（6）吹雪の中を 山小屋を 探した。（杉本 1993: 26）

「移動のヲ」を伴う名詞句は移動動詞とともに使われ、移動の経路を表すと言われている。一方、「状況のヲ」は移動動詞とともに現れる必要はなく、動作が行われる状況を表すものである。（6）において、「吹雪の中」は「探す」という動作が行われた状況を表すものである。「移動のヲ」と「状況のヲ」を異なるものとして考えるか否かは、研究者によって異なる。杉本（1993）では、「状況の『を』を移動格の『を』と区別して考える必要がなく、状況の『を』は移動格の『を』の一種である（p.35）」と述べ、厳密には「状況を表す移動格のヲ」と呼ぶべきだという立場を取っている。一方、加藤（2006）[3] では、「移動のヲ」と「状況のヲ」（加藤 2006 の用語では、「背景状況格」）の連続性をみとめつつも、「状況のヲ」は動詞句の必須項にならないことから格助詞として見なさないという立場を取っている。

文中に現れるヲに関しては「二重対格制約（二重ヲ格制約）」という規則が存在する。1 つの動詞が対格を与えられるのは 1 つの名詞句だけであるという制約であり、1 つの節の中で対格が 2 つ以上現れることは許されないのである。しかし、（6）で「吹雪の中を」という「状況のヲ」句と、「山小屋を」という「対象のヲ」句が現れているように、「状況のヲ」と「対象のヲ」は共起することができる。また、（7）のように、「状況のヲ」と「移動のヲ」が共起することも可能である。

（7）彼らは土砂降りの雨の中をグラウンドを走った。（杉本 1993: 26）

このように機能の異なるヲ句であれば、二重対格制約に違反せずに共起することが可能なのである。

最後に、天野（2010）や加藤（2006）ではヲの機能の一つとして「接続助詞的なヲ」を認めている。これは「〜ノニ」に置き換えられうるような逆接の意味を表し、かつ節と節をつないでいるため、接続助詞的であるとされている。

（8）a. 使い方がわからないのを適当にいじっていたら，ついに動かなくなってしまった。
b. 東も西もわからないのを気の向くままに歩いていったら，いつのまにか駅に出た。
c. お忙しいところをすみません。

（加藤 2006: 136）

加藤（2006）では、「形式名詞＋ヲ」（＝「ノヲ」「モノヲ」「トコロヲ」）という複合辞として接続助詞と見なすべきだと主張している。一方、天野（2010）では、接続助詞的なヲも格助詞であるとし、文脈上想定される他動関係を推論による「拡張他動関係」と呼んでいる。

このように、助詞ヲをどのように分類し、どこまでを格助詞と考えるのかは研究によって異なっているが、どの文献においても「対象のヲ」が最も中心的な機能であり、対象を表す格助詞であることは一致している。そこから「移動のヲ」、「状況のヲ」、「接続助詞的なヲ」の順番で徐々に格助詞性が薄れ、必須要素ではなくなっていく。それを図でまとめると、図 1 のようになるだろう。

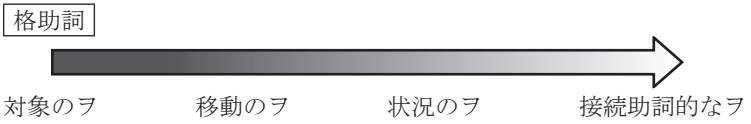

図 1. 助詞ヲの連続性

ここでは、「対象のヲ」「移動のヲ」「状況のヲ」「接続助詞的なヲ」という助詞ヲの機能について概観し、二重対格性制約は機能の異なるヲが複数現れることを妨げないことを確認した。本稿では、助詞ヲの分類や格助詞か否かというような助詞ヲ全体の助詞論には踏み込まないが、挨拶表現文に現れる助詞ヲの機能について考えるのに重要な先行研究だと思われる。

3. コーパスにおける挨拶表現と助詞ヲに関する調査

3.1. 調査方法

藤平(2017）において、「ありがとう」の対象を名詞句で表す場合には無助詞形式が無標であると指摘されている。本稿では、「ありがとう」以外の挨拶表現文の中でも助詞ヲ附加形式が使用されているのかを確認するため、BCCWJ で「ありがとう」「ごちそうさま」「すみません」「おめでとう」を調査した。その際には、無標とされる無助詞形式と比較して考察する。この 4 つの挨拶表現を選んだのは意味的に対象を示しうる挨拶表現であり、さらには他動詞由来でないものだからである。

データの収集方法はそれぞれ以下の通りである。

(9)「ありがとう」

短単位検索で語彙素「有り難う」を検索した結果[4]、8001 件の用例が得られた。その中から、前方共起条件 3 語以内[5] に語彙素「ヲ」もしくは名詞を含むものに条件を絞り、得られたデータの中から対象外の用例[6] を手作業で排除し、助詞ヲ附加形式と無助詞形式の用例を抽出した。

(10)「ごちそうさま」

短単位検索で語彙素「馳走」を検索し[7]、その検索結果 1487 件の中から挨拶表現として使用されている用例 279 件を選別した。そのうち、手作業で主節に無助詞名詞またはヲ句を含む用例を抽出した。

(11)「すみません」

短単位検索でキーを語彙素「済む」に設定し、後方共起条件に語彙素「ます」と語彙素「ず」を追加して検索した。本動詞「済む」として使用されている用例及び主節の述語として使用されていない用例は対象外とした[8] ため 、検索結果 3475 件のうち、3161 件を調査対象とした。そのうち、手作業で主節に無助詞名詞句またはヲ句を含む用例を抽出

した[9)]。

（12）「おめでとう」

長単位検索において語彙素「御めでとう」を検索した結果、1241 件の用例が収集できた。そのうち、手作業で主節に無助詞名詞句またはヲ句を含む用例を抽出した。

本稿では、挨拶表現の対象を表すヲ句と状況を表すヲ句は異なるものであると考えているため、状況を表すヲ句に関しては調査対象から除外して調査を行った。以上、コーパスの検索方法をここに示した。次に、上記の調査方法で得られた調査結果を示す。

3.2.「ありがとう」

藤平(2017）で示されているように、コーパス上の用例数から「ありがとう」文では無助詞形式及び助詞ヲ附加形式のどちらもが生産的に使用されていることが見て取れる。表 1 に藤平(2017）で示されている「ありがとう」と共起する助詞の使用状況を示す。

表 1.「ありがとう」と助詞ヲの共起

（小数第 2 位以下四捨五入）

	用例数	割合
助詞ヲ附加形式（NP ヲありがとう）	195	19.2%
無助詞形式（NPØ ありがとう）	820	80.8%
合計	1015	100.0%

（藤平 2017:60）

名詞句を伴う「ありがとう」文の中で、助詞附加形式は約 2 割を占めている。次に、BCCWJ で見られた用例を（13）に示す。

（13）a. あなた、やさしさをありがとう。 （BCCWJ『積み木くずし』1982）
b. たいへん幅広い重要な課題をありがとうございました。
（BCCWJ『接着と接着剤 その選び方・使い方』1989）
c. 祝福の言葉をありがとうございます。
（BCCWJ『龍と魔法使い 外伝』1999）

藤平（2017）によると助詞ヲ附加形式は 2000 年代以降に増加したことが示されているが、最も古い用例は（13a）の 1982 年であることから、流行語ではなく、ある程度定着した表現だと考えていいだろう。

3.3.「すみません」

「すみません」は名詞句と共起する用例が少なく、合計 17 件しか見られなかった。それぞれの用例数を表 2 に示す。

表 2.「すみません」と助詞ヲの共起
（小数第 2 位以下四捨五入）

	用例数	割合
助詞ヲ附加形式（NP ヲすみません）	2	11.8%
無助詞形式（NPØ すみません）	15	88.2%
合計	17	100.0%

「NP ヲすみません」の用例数が十分な数ではないと思われるかもしれないが、これは元々名詞句と共起する「すみません」の用例数が少ないためだと思われる。BCCWJ で収集できた用例を（14）に示す。

（14）a. 変な質問をすみません。 （BCCWJ『Yahoo! 知恵袋』2005）
b. 失礼をすみません。 （BCCWJ『Yahoo! 知恵袋』2005）

（14）の 2 例どちらも 2000 年代の用例であり、かつ出典が『Yahoo! 知恵袋』であることから、比較的新しい形式であること、さらに口語的な文で使用されて

いることが多いのではないかと予測される。

BCCWJ では 2 例しか収集できなかったが、「NP ヲすみません」が決して非生産的であるというわけではなく、文脈を設定すれば、（15）のように作例が可能である [10)]。

（15）a. 楽しい飲み会でこんな愚痴をすみません。
b. 門外漢なもので、的外れなコメントをすみません。
c. こんなお見苦しい論文をすみません。

名詞句を伴う「すみません」の用例数が少ないため、「NP ヲすみません」の用例は十分に集められなかった。しかし、（15）で見るように、適切な文脈を設定することで、容易に作例できることから比較的に生産的な構文であると言えるのではないだろうか。「NP ヲありがとう」が 2000 年代から増加した構文であったことも考慮し、BCCWJ に収録されているよりも新しいデータの分析が必要であると考える。

3.4.「ごちそうさま」

「ごちそうさま」は「（ご）馳走」という名詞由来の挨拶表現であり、語構成としては「お疲れさま」や「ご苦労さま」に類似したものである。表 3 にコーパスにおける「ごちそうさま」と助詞ヲとの共起の使用状況を示す。

表 3.「ごちそうさま」と助詞ヲの共起
（小数第 2 位以下四捨五入）

	用例数	割合
助詞ヲ附加形式（NP ヲごちそうさま）	7	43.8%
無助詞形式（NPØ ごちそうさま）	9	56.3%
合計	16	100.0%

名詞句と共起する「ごちそうさま」の用例は 16 件であり、そのうち無助詞形式が 9 件、助詞ヲ附加形式が 7 件であった。このデータを見ると、無助詞形式と助

詞ヲ附加形式の差はあまり大きくないことが分かる。「ごちそうさま」の場合においても、名詞句を取るデータ数自体が少なく、一般的傾向を述べるのには不十分なデータ数かもしれないが、「ありがとう」と比較すると助詞ヲを伴う名詞句の占める割合は多い。（16）に BCCWJ で収集できた用例を示す。

（16）a. コーヒーをごちそうさま、ハウンド。　（BCCWJ『笑う犬』1991）
b. 美味しいうなぎをご馳走様でした♪
（BCCWJ『Yahoo! ブログ』2008）
c. いつも美味しいお寿司をごちそうさまです。
（BCCWJ『Yahoo! ブログ』2008）

（16a）に示した用例が BCCWJ の中で最も古い用例である。興味深いのは、ヲ格を取る 7 例のうち、4 例は洋書からの翻訳だということである。さらにその 4 例は全 7 例中出版年の古い 4 つ（1991 年から 2004 年）であるという事実にも注目すべきである。「NP ヲごちそうさま」の構文の発端としては、翻訳の影響も見過ごせないものであると考える。

一方、翻訳でない例を（16b）（16c）に掲載した。（16b）（16c）で見るように、名詞句の前にそれを限定するような修飾句があることが特徴だと言えるかもしれない。元々、「ごちそうさま」という挨拶表現を使用する状況で感謝対象を特定的に指し示すことが珍しいため、（16b）（16c）のようにわざわざ対象に言及するための特別な理由を修飾句として表すことが自然に思われるのではないだろうか。つまり、状況をきちんと設定しさえすれば、助詞ヲを伴う名詞句を用いた「ごちそうさま」は非文法的だとは言えないだろう。

3.5.「おめでとう」

最後に、「おめでとう」と助詞ヲの共起の使用実態を見ていく。「おめでとう」は「ありがとう」同様、「おめでたい」というイ形容詞のウ音便化したものである。そのため、「ありがとう」と同じような使用実態であることが予想される。しかし、BCCWJ で使用例を調査してみると、表 4 のようになる。

表 4.「おめでとう」と助詞ヲの共起
（小数第 2 位以下四捨五入）

	用例数	割合
助詞ヲ附加形式（NP ヲおめでとう）	2	0.5%
無助詞形式（NPØ おめでとう	387	99.5%
合計	289	100.0%

名詞句と共起する「おめでとう」文は 289 件あり、データ数として十分であると言えるが、助詞ヲ附加形式は 2 例（0.5%）しか収集できなかった。このことから、「おめでとう」文では助詞ヲ附加形式の使用が非常に少ないことが見て取れる。（17）に助詞ヲを伴う用例を挙げる。

（17）a. 和宮様には御機嫌ようならしゃりますることを、おめでとう、かたじけのう、お悦び申入れます。

（BCCWJ『和宮様御留』1978）

b. 親愛するニューヨーク家族たちに、ニューヨークファンクラブ創設をおめでとうございます。

（BCCWJ『Yahoo! ブログ』2008）

コーパスでは（17）の 2 例のみが認められるが、（17a）は、「お悦び申入れます」の対象としてヲ句が取られているのだと思われる。よって、ヲ句は「おめでとう」と直接結びついているわけではない。さらに、（17b）の文にも強い違和感を覚えたので、引用元の『Yahoo! ブログ』を調べたところ、どうやら韓国の芸能人による英語での発言を韓国語に翻訳し、それをさらに日本語に翻訳したもののようである。つまり、BCCWJ のデータにおいて「NP をおめでとう」が生産的に使用されている例は今回のコーパス調査では見つからなかったということになる。

しかし、Google で「をおめでとう」を完全一致検索すると、いくつか用例が見られる。例えば、（18）の文である。

（18）すこやかなご成長をおめでとうございます。

（http://www.shashinkan.ne.jp/sasaki/753.html）

そのほかの用例は Twitter や Facebook などの SNS の投稿や個人ブログになるため引用は控えるが、「優勝をおめでとう」「受賞をおめでとう」「誕生日をおめでとう」など、助詞ヲ附加形式の「おめでとう」文がいくつか散見された。コーパス上にデータがないことと新聞等の出版物から用例が収集できないことから、現段階では定着した表現だと断定することはできない。しかし、「NP をありがとう」文が比較的新しい傾向であることも考慮に入れつつ、今後の傾向を見守りたい。

まだ「おめでとう」に関してははっきりした結論が出せる段階ではないが、その他の挨拶表現「ありがとう」「すみません」「ごちそうさま」に関しては助詞ヲを伴う名詞句と共起できると言って差し支えないだろう。このように、挨拶表現が助詞ヲを伴う名詞句を対象として伴うという現象は、「ありがとう」だけでなく、他の挨拶表現で見られる現象であることを確認した。

4. 考察

前節で挨拶表現が助詞ヲを伴う名詞句と共起することを確認した。本節では、挨拶表現文に現れるヲ句が文の中でどのような機能を果たすものかについて考えたい。このヲ句がどのようなものであるかを考える上で、いくつかの可能性が考えられるだろう。筆者が検討した可能性を以下に挙げる。

① 挨拶表現文に現れるヲ句と直接関係する述語が本来は存在するが、省略されている。
② 挨拶表現文に現れる助詞ヲ句は「対象のヲ」句ではなく、「状況のヲ」句である。
③ ヲ格を許す挨拶表現はヲ格を取り得る感情形容詞である。
④ ヲ格を許す挨拶表現は他動性を有している。

まず、①に関して、名詞句と動詞のコロケーション、さらに久野(1978）の「省略の根本原則」を用いて反論を試みる。次に、②に関して、挨拶表現の対象のヲ句が「状況のヲ」句と共起できること、さらには語順の制約があることから、挨拶表現の対象のヲ句は状況を表すものではなく、挨拶表現の感情が向かう＜対象＞であることを主張する。最後に、③と④は相反する考え方ではなく、ヲ格を取り得る挨拶表現はなんらかの他動性を有しているという可能性について論じる。

4.1. 従属節内述語省略説への反論

「NP ヲありがとう」などのヲ句を伴う挨拶表現文を見て、まず思いつくのは、助詞ヲを伴う名詞句と結びつく動詞述語が見かけ上は存在しないが、実際にはそこに存在しているはずの述語が省略されているのではないかという考え方（以下、「従属節内述語省略説」と呼ぶ）であろう。そのような考え方の場合、「NP ヲありがとう」文は複文構造を成していると考えられる。つまり、「素敵なプレゼントをありがとう」という文の場合、(19）のように「くれる」という従属節内の述語が存在するはずなのだが、見かけ上省略されているのだという考え方である。

(19）［素敵なプレゼントを（くれて)］ありがとう。
（天野 2008b: 10 注(6)，括弧は筆者による加筆）

しかし、(20）の例の許容度の違いに注目されたい。(20c）(20d）には違和感を覚える読者が多いのではないだろうか。

(20）a. こんな高価なものをすみません。
b. 突然のメールをすみません。
c. ?? 多大なご迷惑をすみません。
d. ?? お手数をすみませんでした。

従属節内の述語が省略されているのであれば、「ご迷惑」や「お手数」と結びつく動詞は「かける」であることは容易に予想がつくであろう。

それでは、「ご迷惑」と「かける」がどれくらい強いつながりなのか、つまりどれくらい予測可能かということについて、BCCWJ を使用して調査してみる。「迷惑」と共起する動詞を BCCWJ で調査した。「迷惑」の後ろに現れる動詞のリストとその用例数を表 5 に示す。

表 5.「迷惑」と共起する動詞

動詞	用例数
「かける（おかけする、掛ける、掛く）」	834
「こくむる（被る、蒙る）」	18
「かえりみる（顧みる）」	17
「およぼす（及ぼす）」	15
「うける（受ける）」	13
「する（なさる）」	11
「おぼえる（覚える）」	10
「かんがえる（考える）」	9
「あたえる（与える）」	7
「あらわす（表す）」	2
「とりもどす（取り戻す）」	1
「かける（描ける）」	1
「わすれる（忘れる）」	1
合計	939

「迷惑」の後ろに現れうる動詞の中でも、「かける」が圧倒的に多い。939 件のうち 834 件を占め、割合にすると 89.1% である。これだけつながりの強い組み合わせなのだから、復元可能性は非常に高いだろうと思われる。久野（1978）においても、「省略の根本原則」として「省略されるべき要素は、言語的、或いは非言語的文脈から復元可能（recoverable）でなければならない。（p.8）」とされている。復元できれば必ずしも省略できるとは限らないが、省略できる可能性は非常

に高いはずである。しかし、実際には（19c）（19d）は許容されないのである。

さらに、久野（1978）は省略に関して主に 2 つの規則があるとしている。そのうちの一つは「本動詞反復ストラテジー」と呼ばれ、復元可能な要素は省略してもいいが、本動詞は残さなければならないという規則である。この規則からすると、（18）の例文で従属節内の「くれる」という本動詞が存在しているのであれば、それは省略できないはずである。よって、「NP ヲ＋挨拶表現」という構文はヲ句の後ろに存在するはずの従属節内の動詞述語が省略されたのだという説明は成り立たないのである。

4.2. 挨拶表現文におけるヲ句の共起と語順制約

次に挨拶表現の対象のヲ句は状況を表すものではないかという可能性について考える。先行研究で見たように、二重対格制約によって複数のヲは許容されないが、異なる機能のヲであれば共起可能であった。そこで、挨拶表現の対象のヲ句がそのほかのヲ句と共起できるかについて考察することで、「状況のヲ」であるかどうかを確認することができると考える。挨拶表現は移動を表すものではないため、「移動のヲ」が現れることはできない。しかし、（21）で示すように、「状況のヲ」句と共起することができる。

（21）a. 雨の中を傘をありがとう。
b. 忙しいところを変な質問をすみません。
c. 閉店間際のところを美味しいコーヒーをごちそうさまでした。
d. ? 厳しいシーズンの中を優勝をおめでとうございます。

このように、「状況のヲ」句である「雨の中」や「忙しいところ」と共起することができる。（21d）の許容度が落ちるのは、「NP ヲおめでとう」という文がまだ定着した表現だとは言えないためだと思われる。

「状況のヲ」と「接続助詞的なヲ」の区別をするのは非常に難しい。特に、（21b）（21c）は「忙しいのに」「閉店間際なのに」という逆接の意味にも解釈できるため、「トコロヲ」という接続助詞だと見なすべきだという考え方もある。

加藤(2006）では、「状況のヲ」は逆接的な意味を持たなくてもよいという点が「接続助詞的なヲ」とは異なるとしている。挨拶表現においても逆接の意味が出ないようにするに工夫することで、より正確に「状況のヲ」と共起できるかどうかを調べる。逆接の意味が出ないような「状況のヲ」句と、挨拶表現の対象のヲ句が共起する例を（22）に示す。

（22）a. 6 月には珍しいほどの快晴の中を応援をありがとうございました。
b. ? 序盤から 2 位以下を寄せ付けないレース展開の中を、ぶっちぎりの優勝をおめでとうございます。

文脈や発話状況をかなり厳密に設定しなければならないが、（22）のような文は許容できないほど悪くはないと思われる。このように「状況のヲ」及び「接続助詞的なヲ」と共起できることから、挨拶表現文に現れるヲは「状況のヲ」もしくは「接続助詞的なヲ」とは異なるものであることが分かる。

次に語順の制約について見ていこう。挨拶表現に現れるヲ句は「状況のヲ」と共起する場合、「状況のヲ」より前に現れることはできない。（23a）（24a）（25a）に「状況のヲ」句が、挨拶表現のヲ句よりも前にある例を挙げる。次に、（23b）（24b）（25b）に、挨拶表現のヲ句を「状況のヲ」句より前に位置してみるが、どれも許容度が落ちることがわかる。

（23）a. 雨の中を傘をありがとう。
b. ?? 傘を雨の中をありがとう。

（24）a. お忙しいところを変な質問をすみません。
b. ?? 変な質問をお忙しいところをすみません。

（25）a. 苦戦を強いられた中を優勝をおめでとうございます
b. * 優勝を苦戦を強いられた中をおめでとうございます。

つまり、挨拶表現の対象を表すヲ句は、挨拶表現の直前に現れるのが自然であり、「状況のヲ」句より前に置くと許容度が下がる。このことから、句構造において挨拶表現の対象のヲ句は「状況のヲ」句よりも低い位置に生起すると考えられる。

また、天野(2008a) では、「何を文句を言っているの」という構文における「何を」は「何を認識して、何を思って、何に反応して」文句を言っているのかを問うており、「意図的行為の意図が向かう対象」を表すものだとしている。この説明は挨拶表現のヲ句にも適用できるものであると考える。つまり、挨拶表現の感謝・謝罪・祝福の感情が向かう対象が助詞ヲで表されているのである。

本節では、挨拶表現文に現れるヲ句は①「状況のヲ」と共起することができること、②「状況のヲ」句の前に現れることができないという語順の制約があること、③挨拶表現のヲ句は感情が向かう対象を表している、という 3 点を主張した。

しかし、これらの挨拶表現が対象を取り、かつそれを助詞ヲで標示するとはいえ、「ありがとう」「おめでとう」がレキシコンに動詞として登録されるようになったと考えるのは妥当ではないだろう。なぜなら、他動詞であれば受動態を作ることができるなど、ヴォイスやアスペクトなどの時制関連の特性を備えているはずであるが、「ありがとう」をはじめとする挨拶表現にはそのような特徴は備わっていない。もちろん、「すみません」は元来自動詞「済む」であるが、否定形の「すまない」「すみません」で固定化された挨拶表現であり、逆に肯定形で挨拶表現として使用することはできない。このような活用上の制限があるため、決して形容詞もしくは感動詞から動詞に品詞が変化したわけではない。では、どうして他動性を有しているのか、またどのようなメカニズムでヲを認可しているのかということは今後考えていかなければならない課題である。

4.3. 他動性

「NP ヲありがとう」という用例を見て、「ありがとう」がヲ格を取る感情形容詞なのだと思う人もいるかもしれない。形容詞は大きく属性形容詞と感情形容詞に分けられる。新屋(1995) や清水(2013) で指摘されているように、「きらいだ」

「こいしい」「好きだ」「ほしい」などの感情形容詞の一部はその対象を表す名詞句にヲ格を取ることができる。例えば、次のような例が挙げられるだろう。

（26）a. 君を好きだ。
　　b. 君との時間を欲しい。

しかし、感情形容詞がヲ格を取ることは、本稿で述べる挨拶表現が他動性を持つのではないかという提案に対して相反するものではない。新屋（1995）はこれらの形容詞にも他動性を認めている。さらに、本稿で指摘した助詞ヲを伴う名詞句を取る挨拶表現は「ありがとう」「おめでとう」のような形容詞由来のものだけでなく、「ごちそうさま」という名詞由来のものや「すみません」という自動詞否定形も取り上げた。これは、「ありがとう」「おめでとう」がヲ格を取り得る形容詞だから助詞ヲを伴う名詞句の生起を許すのではないことを示唆している。

Hopper & Thompson（1980）は、他動性を「自動詞は他動性がなく、他動詞には他動性がある」という二分法によって考えるべきものではなく、他動性の低いものから高いものへの連続体であると捉えている。他動詞を測るスケールとして、Participants（参加者）、Kinesis（動き）、Aspect（アスペクト）、Punctuality（瞬間性）、Volitionally（意図性）、Affirmation（肯定）、Mode（現実性）、Agency（動作主性）、Affectedness of O（被動作性）、Individuation of O（対象の個体性）の 10 項目を設定した。ヲ句が現れうる挨拶表現の他動性に関してこれらの 10 項目、さらに角田（1991）のテストを通して分析すべきであるが、これに関してはさらなる精査が必要なため、本稿では「他動性」の可能性を示唆するのにとどめておくが、稿を改めて考察したい。

5. 結論

本稿では、「ありがとう」「すみません」「ごちそうさま」「おめでとう」という 4 つの挨拶表現を取り上げ、BCCWJ から収集したデータからこれらの挨拶表現文の中で助詞ヲを伴う名詞句が使用されているかを調査した。BCCWJ では十分なデータ数が得られなかった表現もあったが、「おめでとう」を除き、定着し始

めている表現と言えるだろう。

さらに、挨拶表現に現れる助詞ヲがどのような機能を果たすものであるのかを論じた。「状況のヲ」句及び「接続助詞的なヲ」句と共起できることを示し、挨拶表現の対象のヲ句が「状況のヲ」句ではないことを示した。また挨拶表現の対象のヲ句は「状況のヲ」句よりも前に現れることができないという語順制約から、句構造において「状況のヲ」句よりも下位の位置に生起することを明らかにした。よって、挨拶表現文に現れるヲ句は、挨拶表現が現わす感情（感謝や謝罪、祝福）の感謝が向かう対象を表していることを主張した。

挨拶表現の対象を表す名詞句に伴う助詞ヲが格助詞であるかどうかについては論じきれなかったが、「他動性」を連続的に捉えるという考え方から挨拶表現も他動性も有し、本稿で取り上げた挨拶表現のヲが格助詞である可能性を論じた。

6. 今後の課題

本稿で論じきれなかった点は多いが、それらについてここで述べたい。

まず、最大の課題は挨拶表現に「他動性」を認めるかどうかということである。Hopper & Thompson（1980）や角田（1991）の他動性テストを用いて、ヲ句を取り得る挨拶表現の他動性を検証したいと考えている。特に「ごちそうさま」と共起するヲ句の説明で述べたように、対象を表すヲ句には修飾句を伴っているほうが文としての安定性が高かった。このことは、Hopper & Thompson（1980）のIndividuation of O（対象の個体性）と関わる問題だと思われる。つまり、名詞句の固有性が高いほど、助詞ヲ附加形式が許容されやすいのではないかと予測されるため、名詞の固有性についても検討する必要があると思われる。

次に、挨拶表現文における語順制約が何に起因するものかについて明らかにする必要があるだろう。本稿で、挨拶表現文のヲ句には語順制約があり、「対象のヲ」句は「状況のヲ」句より前に置くことができないことを示した。このことは、「対象のヲ」句が「状況のヲ」句よりも句構造の下位に生起されることを示唆している。しかし、日本語はかき混ぜ（scrambling）操作によって文中の要素を文頭に移動させることが可能であるはずである。それでは、なにがヲ句のかき混ぜによる移動を阻止するのかということについて考えなければならない。

最後に、挨拶表現文に現れる助詞ヲの認可について、統語的な観点からさらなる分析を重ねる必要があるだろう。本稿で論じた挨拶表現文のヲ句は、意味の上では挨拶表現の感情が向かう対象を表すが、挨拶表現にとっての必須要素とは言いがたい。それでは、このような対象が表しながらも必須要素ではない名詞句のヲを、格助詞と言っていいのだろうか。また、元来は対格を認可する能力を持たない挨拶表現がどのようにこのヲを認可できるようになるかを明らかにする必要がある。天野（2008a, 2010）では「何を文句を言っているの」文（拡張他動詞文）を重層構造という考え方で説明している。つまり、「文句を言う」が擬似的な第二の他動詞として機能することで、「何を」を第二の対象として取ることができるという考え方である。このような重層構造を想定することは本稿で取り上げた問題の解決の糸口になると思われる。その際には、「プレゼントをありがたく思う」というような認識動詞構文との関連についても考慮すべきであろう。

使用コーパス

国語国立研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版』(BCCWJ-NT)

例文出典（BCCWJ）

有吉佐和子（1978）『和宮様御留』講談社.
安野光雅（1992）『空想書房』平凡社.
和泉宗章（1978）『算命占星学入門 自分を知りつくす中国最高の占法』青春出版.
今井美沙子（1989）『めだかの心』筑摩書房.
榎木洋子（1999）『龍と魔法使い 外伝』集英社.
ディック・ロクティ（1991）『笑う犬（下）』扶桑社（石田善彦訳）.
穂積隆信（1982）『積木くずし 親と子の二百日戦争』桐原書店.
※そのほか、ウェブサイトからの用例の出典については例文の後ろに記載した。

参考文献

天野みどり（2008a）「拡張他動詞文―『何を文句を言ってるの』―」『日本語文法』8 巻 1 号，pp.3-19.

天野みどり（2008b）「ヲ助詞の多様性―古代語と現代語の対比―」『和光大学表現学部紀要』第 9 号，pp.1-10.

天野みどり（2010）「現代語の接続助詞的なヲについて―推論による拡張他動性の解釈―」『日本語文法』10 巻 2 号，pp.76-92.

石川創（2016）「『挨拶語』・『挨拶言葉』という用語に関するノート」『駒沢女子大学 研究紀要』第 23 号，pp.131-142.

石野博史（1980）「“ゆれ”のあることば―有識者アンケート結果報告―」『文研月報』30 巻 12 号，pp.33-44，日本放送協会放送文化研究所.

加藤重弘（2006）「対象格と場所格の連続性―格助詞試論（2）―」『北海道大学文学研究科紀要』118, pp.135-182.

久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店.

清水泰行（2013）「現代語における感情形容詞のヲ格と語構成」『日本語文法』13 巻 1 号，pp.20-36.

新屋映子（1995）「『彼女を好きだ』という言い方―感情形容詞の他動性について―」『桜美林論集 一般教育篇』第 22 号，pp.93-103.

杉本武（1986）「格助詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武（著）『いわゆる日本語助詞の研究』pp.227-380，凡人社.

杉本武（1993）「状況の『を』について」『九州工業大学情報工学部紀要 人文・社会科学篇』第 6 号，pp.25-37.

高見健一（2010）「『何を文句を言ってるの』構文の適格性条件」『日本語文法』10 巻 1 号，pp.3-19.

角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版.

深沢耕太郎・坂本充（1997）「『数日後』は何日後？～第 7 回ことばのゆれ全国調査から①～」『放送研究と調査』第 47 巻第 4 号，pp.42-53，日本放送協会.

藤平愛美（2017）「感謝表現『ありがとう』における助詞ヲの有無―書き言葉コーパスを用いた共時的・通時的分析―」『日本語・日本文化』第 44 号，pp.53-71.

文化庁（編）（1995）「『ありがとうございます』と『ありがとうございました』」『言葉に関する問答集 総集編』pp.615-616，全国官報販売協同組合.

山田忠雄他（編）（2012）『新明解国語辞典』第七版，三省堂.

Hopper, Paul J. & Sandra A. Thompson (1980) “Transitivity in Grammar and Discourse”, *Language*, Vol.56, No.2, pp.251-299.

付　記

本稿は 217 年 8 月 30 日から 9 月 2 日に、Univerdidade Nova de Lisboa（リスボン新大学）で開催された The 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies における口頭発表を基に大幅に加筆・修正したものである。発表時、また発表に前後して多くの方から貴重なご意見を頂いた。ここに記して感謝申し上げる。

注

1）本稿では、助詞ヲを伴う名詞句を「ヲ句」と呼ぶ。

2）本稿における例文中の下線は筆者による加筆である。

3）加藤 (2006) では「移動のヲ」を場所格と呼び、場所格をさらに離格と経路格に分けた上で、経路格を「通過域・通過点」「移動経路」「移動領域」の三つに分類している。

4）長単位検索においても語彙素「有り難う」を検索することができるが、こちらでは 7607 件しか検索にかからないため、短単位検索を使用した。

5）前方共起条件を 3 語に設定したのは、感謝対象を表す名詞句と「ありがとう」が離れた位置に生起している用例も検索にかかるようにするためである。もし前方共起条件を 1 語に設定した場合、名詞句や助詞ヲが「ありがとう」の直前に生起している用例のみが検索にかかり、名詞句と「ありがとう」の間に副詞句や記号が入っているものが検索にかからないのである。その一方で、前方共起条件を 3 語以内に設定することによって、対象外の用例もかかるため、それらは手作業で取り除いた。「ありがとう」の検索方法に関する詳細は，藤平(2017）を参照いただきたい。

6）「ありがとう」やその他の挨拶表現に前接する助詞は助詞ヲと無助詞だけでなく、助詞ハや助詞モなども見られるが、これらはとりたて詞であり、本来の述語との格関係が見えにくく、さらには (i) のように状況句・時間句に接続する例もあるため、本稿の調査対象外とした。

(i) a. 先日はありがとうございます。
　　b. 今年もありがとうございます。

7）長単位検索において語彙素「御馳走様」を検索することも可能であるが、この検索結果は 158 件となる。挨拶表現として使用されている用例をなるべく多く収集したいため、今回は短単位検索を行った後、手作業で対象外の例を取り除いた。
ちなみに、BCCWJ の長単位検索において、そのほかの挨拶表現は「有り難う」「済みません」「御めでとう」が感動詞として登録されているにもかかわらず、「御馳走様」だけが普通名詞一般として登録されていることも興味深い。BCCWJ における感動詞や挨拶表現の取り扱いについては、稿を改めたい。

8）本動詞の例及び副詞要素として使用されているため対象外とした例とは以下のようなものである。

(ii) a. 白黒をハッキリ区別しなければ気がすみません。
（BCCWJ『算命占星学入門』1978）
b. すみませんが、切手を貼らせてもらえませんか。
（BCCWJ『空想書房』1992）

9）「ナ形容詞＋で」は助動詞ダの連用形であり、イ形容詞の連用形と同じく従属節を成すものであると考える。しかし、「名詞＋デ」の場合、助動詞ダの連用形と捉えるべきか、もしくは助詞のデと捉えるべきかの判断が困難であるため、対象外とした。

(iii) a. かわいくてすみません。（イ形容詞）
b. 無礼ですみません。（ナ形容詞）
c. 変人ですみません。（名詞）

10）ヲ句が現れる挨拶表現文に対する許容度の判断は人によって大きく差があるようである。挨拶表現ごとの差は少なく、ある用例の許容度を高く判定する人はどの挨拶表現でも許容度が高くなる傾向にあるようだ。本稿では BCCWJ での調査及び google 検索、筆者の内省、少人数への聞き取りを基に判断しているため、大規模な許容度調査を行う必要があると思われる。

Japanese Fixed Social Expressions and the Particle *wo*: A Corpus Analysis of Written Japanese

Manami FUJIHIRA

This paper discusses the particle wo following noun phrases (NPs) that occur in fixed social expressions of gratitude or apology: "NP-*wo arigatou*" (Thank you for NP), "NP-*wo sumimasen*" (Excuse me for NP), "NP-*wo go-chisou-sama*" (Thank you for NP), and "NP-*wo omedetou*" (Congratulations on NP).

Japanese fixed social expressions such as "*Arigatou*" are not expected to take objective noun phrases. The reason for this is not only that these social expressions are classified as interjections, but also that "*Arigatou*" originates from the adjective *arigatai* (grateful). However, Fujihira (2017) showed that the Japanese expression of gratitude "*Arigatou*" can follow *wo*-marked NPs.

This study analyzes examples collected from The Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ), and reveals the following three points;

1) In addition to "*Arigatou*", other fixed social expressions such as "*Sumimasen*" (Excuse me), "*Go-chisou-sama*" (Thank you for the meal), and "*Omedetou*" (Congratulations) can follow *wo*-marked NPs.
2) NP-*wo* in such fixed social expressions can co-occur with the situational NP-*wo*, which means that the NP-*wo* in the fixed social expressions is distinct from the situational NP-*wo*.
3) NP-*wo* in such fixed social expressions cannot precede the situational NP-*wo*. This means that NP-*wo* generates in a lower position than do situational adverb phrases.

Finally, this paper discusses the function of the particle *wo* in the examined fixed social expressions, as well as the possibility that these expressions demonstrate some degree of transitivity.